大学出版

12号
'91夏

大学出版部協会
Association of Japanese University Presses

北海道大学図書刊行会
Hokkaido University Press

慶應通信
Keio Tsushin Co., Ltd.

産能大学出版部
The SANNO Institute of Management

玉川大学出版部
Tamagawa University Press

中央大学出版部
Chuo University Press

東海大学出版会
Tokai University Press

東京大学出版会
University of Tokyo Press

東京電機大学出版局
Tokyo Denki University Press

東京農業大学出版会
Tokyo University of Agriculture Press

東京理科大学出版会
Science University of Tokyo Press

法政大学出版局
Hosei University Press

放送大学教育振興会
The Society for the Promotion of the University of the Air

明星大学出版部
Meisei University Press

早稲田大学出版部
Waseda University Press

名古屋大学出版会
The University of Nagoya Press

京都大学学術出版会
Kyoto University Press

大阪経済法科大学出版部
Osaka University of Economics and Law Press

関西大学出版部
Kansai University Press

九州大学出版会
Kyushu University Press

大学出版
12号

Summer・1991

大学出版部協会とは何か――幹事長就任にあたって――斎藤　至弘　1
文理の和合――セネカの鏡――茂手木元蔵　3
出版――私の図式、又は若い編集者へ――八木　俊樹　8
大学出版部ニュース――12
新刊案内'91・4～7――17
大学出版部協会役員／19大学出版部代表者及び協会・部会等担当者一覧――24

大学出版部協会マーク・デザイン　道吉　剛

本小冊子の表示価格は、税込価格です。

大学出版部協会とは何か

——幹事長就任にあたって——

斎藤　至弘
（東京大学出版会専務理事）

大学出版部協会は現在、十九の大学出版部で構成されているが、各々の出版部は、その生い立ち（歴史）も、母体とする大学の目的（建学の精神）も、それに連動する出版部の設立趣旨やそれに基づく活動も、組織の形態やその規模も、それぞれに全くと言ってもいいほど違う。しかも、他国は知らずこの日本では、民間の出版社と明確に区別される大学出版部固有の性格といったものについて必ずしも共通の社会的合意といったものが形成されている訳ではない。学術書や大学教科書の刊行は大学出版部の専売特許ではないし、慢性的な財政的不如意も必ずしも大学出版部だけに固有の悩みではない。ひねくれた言い方をすれば、我々大学出版部に共通しているのは「大学」の名を冠しているということだけである。しかも、出版社か大学の一機関かどうも判然としないというのが、一般社会の認識であろう。ならば、このような大学出版部が寄り集まって作り上げている大学出版部協会とは何か。どんな旗印の下、どの様な目的を持った集合か。会員相互の友好・親睦を図るだけが目的ではない、と思うが。（実を言うと、大学出版部協会に対するこのような漠然とした疑問は、予てから感じていたし、今も皆無とは言えない。この疑問は幼稚だろうが本質的でもあるので、忘れずにしまっておきたい。）

以上のような疑問があるにも拘らず、このたび幹事長を、（臆面もなく）引き受けることになった。大学出版部協会のあるべき姿、などと大上段に振りかぶるのは一先ずあとにして、差し当たって、これからどうするか、どんな活動をして行くか、を真摯に探って行きたいと思っている。勿論、これまでの協会の辿って来た歴史を継承し学ぶべきは学んだ上でのことである。創設以来現在までの二十八年間、協会が歩んできた足跡を見るに、初代幹事長箕輪成男氏から中平千三郎、石井和夫、山田渉氏に至る四代に亘る幹事長の下、協会メンバーは、出版部相互の研鑽・研修、編集・販売上の共同事業、及び他国との国際交流等に力を傾けて来たことがよく分かる。そうした努力の積み重ねの歴史の中に一貫して仄見えるのは、「共同体としての協会」

を社会的に（国内だけでなく国際的にも）認知させること、であったように思われる。その努力の成果は、国際的評価の向上、協会全体としての流通システムの開発・改善となって現われ、一九七九年に日本生命財団「学術書出版助成」の提供を協会として受けるに及んで結実したかに見える。（これらは夫々歴代の幹事長箕輪、中平、石井各氏の努力と尽力によることが大であったことは言うまでもない。）これら一連の成果は、各出版部が単独では成し得なかったことを、協会として一つに纏まることによって始めて手にすることができたのであり、それは取りも直さず協会が団体として社会的に認知されて来たことの証しであろう。それでは、先輩・先人の作り上げて来たこの世界に安心して浸っていればよいか、と言えばそうではないと答えざるを得ない。要は我々自身が作り上げねばならない中味であり、内実を我々自身の手でどう固めて行くかである。出来合いの外面をいくら評価されても、中味に自信が持てなくては何にもならない。自他共に誇れる中味にして行くこと、それが我々自身に課せられたこれからの課題なのである。

当り前のことだが、協会があって個々の出版部がある訳ではない、個々の出版部があってこその協会なのだ。しかし逆説めくが、協会があってはじめて出版部としての存在も社会的に認められると言う場合もある。部分が全体を形作るが、全体もまた部分を際立たせ活性化する。生き生きとした部分は全体を活性化し、活性化した全体はまた部分を生彩たらしめる。部分と全体とのこの有機的な繋がりこそこれからの大学出版部協会のあるべき姿を暗示する。

アメリカには全米大学出版部協会（ＡＡＵＰ）がある。九十余の大学出版部によって構成された全国的な組織であるが、民間の出版社と截然と区別される特徴を持っている。即ち、（商業出版社が決して手を出そうとしない、また参与することもない）非営利的研究書の出版の世界を形成していて、それに対しての社会的合意もあり、またそれによって協会独自の社会的発言力も持っていることである。事情も条件も異なるが、中国の大学出版部も同様な独占的な力を持っている。韓国の大学出版部協会に於いても似たような事情にある。国が違えば、出版の形態も、出版事情も、出版を見る社会の目も、異なることは言うまでもない。日本の出版事情も、大学出版の在り方も、それに対する社会的認識も、他国と違うのは当然である。今のところ、我々は、大学出版部として他と区別されるだけの独占的な発言力を持ちえないでいるが、それが特段に悲しむべきことだとは思われない。他国とは違った出版環境の中で、我々は我々独自の道を探って行くべきである。またそうするだけの力を潜在的に持っていると信ずる。

文理の和合——セネカの鏡

茂手木元蔵

現代日本における学問の悲劇の一つは文すなわち文系学問と、理すなわち理系学問との離間である。戦後の日本は理系学問特に工学の大躍進を見た。明治以降欧米から学んだ科学を自家薬籠中のものにしたばかりか、その水準を乗り超えるまでに至った。ところが文系学問、特に思想や哲学においては欧米のそれらを勉強はしているが、大きな進歩は見ていないし、新しい方向も見出してはいない。文理がアンバランスであるばかりか、理はいよいよ独走する観がある。

このような傾向はいつから始まったか。明治以降、少なくとも終戦までは文理の和合は教育の基本的原理であった。たとえば旧制高校令（大正七年十二月勅令）を見ても、「高等普通教育ヲ完成スル」ことを目的としている。その教育の「普通」とは特に専門ではない科目のことで、文科でも理科でも共通に学んだ学科の意味である。程度や授業数の差はあっても、文科でも数学や自然科学はあったし、理科でも国漢はもちろん法制経済もあった。これを見ると文科でも理科でもバランスのとれた教育を行ない、その後の専門教育に進んでも、基本的にはバランスのとれた研究教授を行なうことを目的としたと思われる。現在の東京外国語大学が外国語専門学校から大学へ移行したころ、沢田という学長が学問の必要性から、単に外国語だけではなく、広く各一般科目を取り入れたという話を聞いたが、それは戦後の新制大学の一般教育でも同じである。現在でも一般教育科目は、すべての学生が履修すべき人文、社会、自然、総合などの各分野の科目である。

しかし、旧制高校においても新制大学においても、以上のごとき教育方針が果して目的どおりに機能していたであろうか。そうとは思われない。旧制高校においては、文理それぞれに独得の学問志向がいよいよ強まってきて、それぞれの間の関係意識は、その当初の目的とは違って、離れるばかりであった。しかし、まだ両者のいずれかが他方よりも優勢であるとかないとか、そういう区別は余り認められなかった。

新制大学の一般教育科目の目的も、旧制高校と同様にバランスのとれた教育を行なうことであった。大部分の旧制高校は文理学部になり、また新たに作られた新制大学の中にも、一般教養を目標として文理学部を作った例もある。しかし、この科目はむしろ高校の教育科目のやり直しのように見られて、学生には単位の取得以外の外興味を引くこ

とが少ない。それどころか、一般教育は専門教育よりも一段と下等視され等閑視され、教授担当者もベテラン教授が当るべきであるが、事実はそうではない。したがって文理学部はそれぞれ高等化（？）を望んで、文科と理科に分かれることを要求し、その大部分は両学科に相当する専門諸学部を作ったし、学科内容の改善を行なった。

しかし、このような傾向は文理の間隔をいよいよ広めるとともに、その格差をも生むに至っている。そのような相違は以前はなかったし、戦前などは文、特に「法科万能」だったくらいである。もちろん、そこには時代変化による要求があるとはいえ、その格差は広まるばかりで、理工はますます独走の観がある。それを文は言わばあれよあれよと眺めるか、あるいは何の新味もない旧套にしがみ付くばかりである。こうなると学問のバランスが崩れ、一方が独走することによって幾多の弊害が生ずる。それについてはあえて言う必要もないが、しかしもしこういうアンバランスが今後続くとすれば、いかに日本の理工の学が発展し、生産が高まり、製品が世界に進出したとしても、世界の嫉みや軽蔑を買うことはあっても、心からの尊敬をかちうることは出来ない。事実日本に対する海外の最近の評価がそれを物語っている。近頃では生産会社や商社などのうちには文化的事業にも熱を入れ出したものも相当あるが、それがもし依然として打算に立つものとしたら、かえって根性の卑しさを軽蔑されるであろう。

要するに文系学問は明治以降今まで欧米からの借り着をするばかりではなく、理系学問が欧米の学問を自己の血肉にして発達せしめたように、従来の道を深めるとともに更に新しい道を発見し創造することである。理系学問はそれを見事に果しているが、それ自体も文系学問に手を貸し、自他共にあのアンバランスを正す必要がある。文系もこの理系の進展には刺激を受けて、何かをしなければならないと思っているからである。

以上の方針を遂行するうえに参考となるちょっと変わった文献の一つとして、ローマ時代のセネカ著『自然研究』をあげることが出来よう。古い書物ではあるが、中味は決して古くない。その中の一つの研究を以下に紹介しよう。

本書の内容は天体、大気、地上についての三つの学で、全部で七巻から成っており、㈠大気中の火、㈡電光と雷、㈢陸地の水、㈣(A)ナイル河、㈣(B)霰と雪、㈤風、㈥地震、㈦彗星である。これらについてセネカはギリシアやローマの諸学者の説を紹介し、論証や批判を行なっているが、そこには多くの学問上の不備があり、独断的な見解もあるが、しかしこのような自然研究は結局は人文研究に結び付き、道徳の進歩に役立つと考えられるのである。ここに言わば文と理の和合が認められ、両者のバランスが保たれていると言えよう。その実際を右㈠の中の重要部分である「虹」の説明について見よう。

〈太陽の近くにある厚い雲の中には、太陽の像が、ちょうど鏡の中にでも写るように生ずる。太陽の像が、地上の泉か静かな湖の中に見られても不思議ではないごとくであ

る。天上においても地上においても同じように、太陽の姿は反射されることが出来る。このようにして、濃密な雲の中に太陽光の反射像として生ずるのが虹である。〉

つまり虹の原因を反射と見るのであるから、現在のごとき屈折説からすれば間違いである。したがって、正しくない原理や前提から出発した主張が正しくないならば、セネカの以後の議論は正しくないと言えよう。しかし以下に紹介する話は、十分に納得出来るものであるから、一つの自然研究のパターンとして、あえて示すことを許されたい。

とにかく虹を反射現象と見るところから、話は鏡の問題に移っていく。しかしこれが相当の部分を占めている。かいつまんでご紹介しよう。

〈虹の基にはいかなる本体もなく、単に他の物体を虚造する以外は何もしない鏡のごまかしである。鏡のうちには、示されているものは実際には存在しないからである。〉

したがってギリシアの虹の女神イリスのごとき宗教的実体も考えられなかったであろう。それどころか鏡となると、そこに写るものは「本当の物体の空虚な模像」であるのみならず、〈その像自体も、誰かが作った鏡によって変てこにゆがめられる。覗き込む者の姿をねじ曲げて、その姿を途方もなく拡大して、人並の身体の外観や大いさをも越えるように写す鏡もある。〉

こんな話から進んでアウグストゥス帝時代のホスティウス・クアドアという金持ちだが貪欲な、大金の奴隷であった男の話が書かれている。少々わいせつな話でもあるが、ローマ時代の世相や風俗を知る上にも、また（これはとんでもない本題からの逸脱だが）現代日本の性道徳を反省する上にも、あえてその大要を話そう。

〈この男のわいせつ振りは当時の芝居にも登場するほどであった。彼は単に一方の性にだけ淫らな関係があったばかりではなく、女性と同じく男性にまでも色情を起こした。彼は、映像を遥かに大きく写し出す鏡を作った。そこに写る指は、腕の長さと太さを越えるほどであった。そして彼は、それらの鏡を並べて、自分が男と肉欲にふけるとき、後ろにいる自分の「種馬」のすべての動きが鏡の中に見えるようにし、次に相手の男根の偽の大いさを、まるで実物のように喜ぶのであった。〉

実景はただ想像する以外はないが、当時としても相当なものであったろう。こんなことも書いてある。

〈誓って言うが、罪悪というものは、それ自体をまともに眺めることを恐れる。堕落し、あらゆる非行に慣れた人間たちのうちにも、乏しいながらなお「目の羞恥心」があるものである。……現に売春婦たちにも或る慎しみ深さがあって、公衆のおもちゃに差し出されたあの肉体を、みじめな快楽に耽けることが人に見られないように幕を引いて隠す。したがって事と次第では女郎屋でも控えねばならぬことがある。ところがあの怪物男は、自分のわいせつ行為を見世物にして、どんな深夜の闇でも隠すには十分でない行為を、自分自身に見せていたのである。〉

こんな話は更にどぎつく書かれて、嫌悪をさえ催すほど

であるが、しかしセネカの言いたいことは次のようなことであるのを知ると、彼はさすがだと思う。読む者の今までの心を清めるようである。

〈鏡が案出されたのは、人が自分を知るためであったが、それは次のことから多くの益を得ようとしてであった。すなわち、まず自己自身を認識することであり、次は、場合に応じて熟慮することである。つまり、美しい者は嫉妬を避けるためであり、醜い者は徳によっていかなる肉体の欠陥をも償わねばならぬことを知るためであり、若者は生涯の青春時代において、これが学ぶべき時代であり、勇気ある行為を断行する時代であることを思い出すためであり、また老人は白髪にとって見苦しい行為は捨て去って、死について何かを考えるためであった。これらのことに対して自然は、われわれが正に自分自身を見る技能をわれわれに与えたのである。〉

日本語の鏡も「かがみ」、「カゲミ」、「影見」の意とされるが、それが「うつして見る」ということから、手本、模範、鑑（かがみ）となる。古代において鏡が尊重されたゆえんであろう。その古代の姿をセネカはヴェルギリウスの詩（『牧歌』二・二五～二六）を引用しながら、次のように多少ロマンチックに描く。

〈透明な水や滑らかな石が各人にその映像を反射する。

近頃わたしは自分の姿を　浜辺で見た
風もおさまり　海が穏やかだったときに。

このような鏡に自分を写して髪をくしけずる人々の生活の仕方は、どんなに奇麗であったと思うか。それはまだ素朴な時代であって、たまたま与えられるものに満足し、有益なものを悪用に転ずることは決してなかったし、自然が発明した品を色欲や放蕩のために盗むこともなかった時代である。〉

〈そのような昔の人たちが野暮ったい生活をしていた当時でも、彼らはそれなりに立派であった。つまり、仕事でたまった垢（あか）を河の流れを浴びて洗い流したり、念入りに頭髪を整えたり、見事なあごひげの手入をしたり、また各人がこのような世話を他人のためにするのではなく、自分自身のために精出してするならば、結構立派だったのである。かつてはゆったりと垂れ下げているのが男子の習慣であったこの髪の毛は、たとえ女房でも手を触れさせてもらえなかった。だが彼らは、その髪の毛を自ら勇んで、何の巧むこともなく格好よく揺り動かすのであった。それはちょうど高貴な動物たちがたてがみを揺り動かすに異ならなかった。〉

ところがである。

〈その後、すでに贅沢の風が主権を握るようになると、等身大の鏡が金や銀に彫刻され、次には宝石で飾られた。そのような鏡の一つが一人の女に要した価は、昔の女の持参金以上の額であった。つまり、貧乏な将軍たちの子供に公費で払ってやったあの持参金である。スキピオの娘たちが金の中に入れられた鏡をもっていたと思うか――彼女たちの持参金が重たい銅銭だったというのに。〉

ローマの将軍であり政治家であったスキピオ大アフリカーヌスが、カルタゴのハンニバルと戦って大勝し、ローマのためにカルタゴからいつも沢山の徴発を行っていたのに、自分の娘たちには何も遺しておかなかったからだというのである。だからこう言う。

〈そのような名誉に機会を与えた貧乏というものは、ああ何と幸福であろうか。もし彼女たちがあのような鏡をもっていたならば、この持参金はもらえなかったであろう。……しかし、かつてはローマの人民が誇りをもって贈ったそのような持参金も、今では解放自由民の小娘たちが求める鏡一箇分にも足りない有様である。〉

そして最後にこう言う。われわれ現代の日本人には耳の痛い話でもある。

〈実際、富の豊かさということだけに刺激されて、徐々に悪い方へ方へと前進したのが贅沢であった。そして悪徳が異常な増大に達した。そして、あらゆるものが種々様々の技巧によって区別が付けられぬようになり、かつては女の装飾品といわれていたものが、今では男の持ち物になっているほどである。あらゆる男と僕はあえて言う。兵士でさえも。すでに今では鏡は装飾のためにのみ利用されているのではないか。どんな悪習でも、やがては必要欠くべからざるものにならなかったためしはない。〉

以上によって鏡の話も終り、これが虹の「自然研究」の最後の記述であるが、これをもってセネカの言うことが、人文と自然のそれぞれの研究が互いにバランスをとっているとは判断されないかも知れない。これでは結局は「自然研究」の仮面をかぶった人文研究ではないかという批判があるかも知れない。しかし、これは私が虹の自然研究の一部分を、紙数の関係上、ごくあっさりと紹介したからかも知れないが、当然のことながら原典には、自然研究の部分も相当部分を占めている。しかし、いずれにしても私はこれを一つのパターンとして、あるいは原則的にこの考え方に教えられて、現代のわれわれが重要と考える「文理の和合」の実現を計ってみたいと思う。

さて、それでは具体的にどういう方策があるか。私には一つの試案がある。要するにそれは文系学問と理系学問の新しい意味での共同研究であるが、しかしその説明は多少の論考を要するので別の機会にゆずることとしたい。

平成三年七月

（もてぎ・もとぞう、哲学）

出版

——私の図式、又は若い編集者へ

八木　俊樹
（京都大学学術出版会）

カルチャーなる言葉が流行（はや）っている。一昔前であれば俗な意味での教養という言葉の灰殻（ハイカラ）な使用法であったが、今日では果敢にも、この言葉の一見本来的（クラシカル）な使用例が目立つ。無論現代でもカルチャー・スクールにみられる様の通俗的の使用例が一般的であろう、亦逆に過去にも、例えばアダム・スミスの正統な嫡子を自負する学者達が市民社会の成立史と波長を一にする、社会的カルチャーや各人のモラルを説くのを聞かなかったわけではない。しかし、言葉というものは一つの宇宙であり、表層から核に至る迄幾つかの層をなしている。そして、どんな言葉にも厭な言い様だが、粗雑な素人的用法（アマチュアリズム）と核的な玄人的用法（プロフェッショナリズム）があろうが、その界面での攻ぎ合いの分布と色合いに、聊かの異変が起きていると言ってよい。酒の文化に就て語る玄人に伍して、流行（はや）りの地酒ブームや銘酒ブームに乗じ忽ちにして銘酒の製法や味や流通に関する薀蓄を傾ける若者は多い。この線上を只管（ひたすら）走れば、そこに計らずも構造主義やアナール派や中世・古代史ブームが出現すると言ったら、過言の謗りを免れぬであろうか。——詰るところ私は、素人が興味や趣味が昂じて軽症の玄人病に罹り、玄人も亦この世の存在証明の為か生来の素人っぽい自己顕示症の為か知りはしないが、この玄人病に程よく同伴している、と言いたいのである。換言すれば、界面は攪拌されて文化という言葉の大政翼賛会が出来て了った、と。

嘗て教養文庫があり岩波新書があり、一篇の詩作品も書くことなく矢鱈と詩論をふりまわす少年青年がおり、古典的な佇いをした玄人や蒲魚（カマトト）がいた。青年達がこの界面の断層を体験し、亀裂を穿ち遊びしていたが、断層は未だ緩やかに結合していたと言っていゝ。今日この断層は、逆説を弄するわけではないが、その深淵を覗かせうる迄に拡大している筈であるのに、何故に少年誌や週刊誌のグルメ・カルチャーやテクニカル・プロの劇画（ドラマ）を徒花に戴くワイマール共和国が成立したのか。情報化と経済力さ、と為（し）たり顔は言う。無論、愚劣だ。虚無の深さに戦いた挙句のデカダンさ、とニイチェ風の玄人好みの応えがあろうが、それは

半面の正解だ。私なら、社会のモラルとパーソナリティに於る断念の欠如と、それに正確に比例する真の意味の政治の拡散と貧困を正解としたい。現代のこの深刻な神経症と危機の射映に過ぎない東西の構造的位相の分裂症を、情報と経済力という文化デカダンが強引にロボトミー手術した、というのが今回の東欧問題の率直な感想ではあるまいか。若し一人のレーニンがいたら、どんな警鐘を鳴らしどんな政治プランを提出したであろうか。

ところで、問題は出版、文化の牽引車を自任していた出版である。言う迄もなく出版は文化の索引ですらありえないと洒落たところで、出版人の顰蹙を買う事も最早あるまいが、だが併し、学術書不振の演歌と小唄が途切れたわけではないし、亦自戒の為にも事を正確に述べて置かねばならぬが、若しそれが教養書や概説書を意味しているならば、こういう風な事だ。第一に、現代青年のマニアックな趣味病を誘因する強迫神経症の存在に鈍感であり、第二に、義務教育の延長に過ぎない様の古典的教養主義を強制する教育ママ的発想は、読者を無礼(なめ)た仕儀であり、最後に、読者が細胞レヴェルの動物学を求めているのに、聊か古風な個体動物学の一般論で応答する様の教養書なぞ、詐欺的行為というものだ。といっても、細胞レヴェルと自由に交流した一般個体動物学を書きうる達人はそういやしないし、かかる個体動物学の水準に照射された、細胞レヴェルの現在的可能性の臨界点を平易に描きうる専門家も亦、矢鱈とみつかるわけではあるまい。次いで若し、先の学術書を専門書に解するなら、何(いつ)れの御時も流通領域の小さい事が専門書の宿命であると諦観するより他はない。抑々、書物は書物の四次元円錐体の一つの平面からの逸脱と横断と、穿鑿と空孔への没入の、巨視的にみれば他の平面への自己運動を辿る。従って細胞分裂と微細化は書物の正(プラス)の固有則として認めざるをえない、とすると、昭和も三十年代の一種の人文主義の黄金時代への郷愁(ノスタルジア)はやめたがいゝ。ただ尤も、分裂の果てのアメーバ状の専門書といえども書物である限りに於て、そのジャンルの中での或はジャンルを超越した何がしかの一般性——実のところ、だが、この一般性は、書物の時間的流れに生じる新たな平面との相関体であり、それ故仮控の、未来形の一般性である。だから、それ故にである、吾々にとってそれは、書物の世界に政治というものを介在させうる最大の根拠の、辛うじての微分値である——を帯びている。とするなら問題は、専門性とこの仮控の一般性を弁証した挙句の書物が、自己の定款すなわち自己組織論、平たく言えば己れのみが信じる価値観と主観に照合して、或る閾値を超えたものを出版する以外あるまい、無論身銭を切っても、である、と

だけ差し当り言って置く。熟れにしても間違っても、こういう書物を胎児や未熟児のうちに、話芸やパフォーマンスの舞台に上げてはならぬし、傾向と対策に合わせて殆ど愚にも附かぬ触りだけを陳列した論文集や特集誌に裁断し、仕上げるのはやめたがいゝ。ましてや、これはもう有能な出版人程罹かり易い中毒症であるが、そうした所為を政治的な仕掛と錯覚する事は、何としても避けるべきであろう。それらは殆ど文化デカダンスそれ自体である。

然し、実を言えば、出版人の生態学を正確に伝える為には、彼らの皮膚呼吸や末端神経や遺伝子の振舞いを詳述する必要がある。その由って来る所以は、彼らの等身大の行動や肖像画は文化デカダンスその儘であり、そのような時代に於る遠近法は、彼らの好む自意識や触覚の繊細な計算と運営に迄論及しないと正当性を欠くということにある。それ許りではない、何せ彼らは他人批評と自己弁解に関する相当な手足であるから、そうでなければ用捨ない駁論を被らねばならぬからである。――だから、変化球で攻めてみよう。

凡そ出版人で、職業として出版の世界に足を踏み入れたものはいない。出来の悪い唯一神から天授された殆んど前近代的の仕事としてである。成程、職業的な余りに職業的な今日と雖も、凡ての職業は低音部に個有の仕事の領域を持ち新たな仕事をも生み出し、青年の古典的な或は情報化時代の現代的の専門職（仕事）への誘因となっており、職人漫画流行の因ともなっている。だが、然し、彼らには断念という入門動機がない。だから、若しかしたら彼らは凡ての選択肢に殆ど絶望しているからそうするのかも知れないが――、対価の極に針を振るのに敏感すぎるし、職人には必須の実務の修練も長距離走行の孤独をも厭う。尤もこの点では、出版の世界に巣くう壮年組が、己れの担任する原稿も陸に読みもしないし、本の装訂に至る迄の意を致し工夫を凝らすべき作業を御座なりにしている風潮の下では、彼らは免責されるかもしれないが。

出版人にお務め人はいらない。出版人の出生の秘密である左翼頽や文学者志望中途退学は、一般に了解されているより深い因縁を出版というものの内実と取り結んでいる。と言うのも、彼らは断念を経て止むを得ず出版を選択したが、この世界に入るや否や、もうひとつの断念すなわち己の虚数性を知ることを強制されるからである。出版という虚業の中にも勿論実数的流れはある。だが縦令自ら立案し著者を選定し彼との正確な応答の果てに超然たる傑作を造形したとしても、それは私の結果ではない。私のモノでもない。ましてや著者との交通や社交なぞ間違っても円滑に進むはずはなかろうから、実数としての出版、校正や

割付や尨大な資料に拘泥することで、辛うじて職人としての存在を証明し、都心や場末の酒場で自他の著者と書物の狷介で猥雑な批評と弁明の酒宴に淫することで社会的に存在を確かめて来たに過ぎない。

書物の構想と読書との知の運動の媒体としての出版は、始点と終点とに断絶を有する。この切断を無理数的に埋め実数として連続性を保証しようという試みがないではない。編集権の確立を工作せんとした流派があった。だが彼らはそれを、いわば著者との私通の上に強行せんとした、為に短命を宿命づけられており、延命せんとすれば、自家中毒を栄養剤に宗派運動を展開する以外になかった。彼らの流儀は、終点の不連続を縫合しようとする広告や宣伝の先駆者という栄光を担ったが、紛れもなく彼らは、出版に於る政治というものを誤解し錯認していた。

――出版は二重の断念の上に立った虚数の営為である。それ故、凡ゆる戦術を駆使し凡ゆるエネルギー回路を想定する自由をもつ。そこに出版の政治が逆説的に存在する理由があるが、併し出版は殆ど失敗に終わる小さな革命の連続に於て成り立つ不連続であり、その事の決意の上に漸う己れの精神の様式と政治性を仮定できるものに過ぎない。

出版というこの完全な黒衣は、疑い様もなく不健康であろう。だからと言って、出版を制度化された職人同志の、例えば、編集者と科学ジャーナリストといった、米風のやり方が、二重の断絶を聊かも変えるとは思わない。確かな事は、職人という概念は単数形ではない。技能と欠落を抱いた者が互いに各々を交換しうる存在的位相をもったとき、その一種の共同性をプロフェッショナルと名附ける事ができるのみである。

出版人とは黒衣としての職人であり、職人とは複数形でのみ使用できる、僅かに、この二つの事が言いたかった。それにしても、本の内容から活字や余白の表情や、装訂の佇まいに至る迄、感銘する本は少なくなった。最終校正すら読まない青年が――彼らは実のところ一頁に一、二の誤字なぞ、それを見つける労苦に比して問題ではない、わかりゃいゝんでしょ、と宣わっているのだ――出版界に徘徊しはじめた。何をか況んや。

この稿の校正時に余白を見つけたので附け加えたいが、複数形の職人が出版屋と機械工との間で成り立っていたら、吾々が今の様の写植システムの下僕に堕する事はなかったであろうし、紙やクロス職人や印刷工との共同性や、装訂者との共犯性なくして、亦編集人同志の紙面構成に関する、本そのものを通した仮控の対話なくして、一個の独立した人格ある書物が造形されようはあるまい。書物は手づくりという事の現代的意味は、複数形の職人の存在であろう。

北海道大学図書刊行会

■アイヌ語は日本語の祖語であり、アイヌ語は性にかかわる言葉から発祥した。――アイヌの長老山本多助翁の『イタクカシカムイ』（二四七二円）が売行きよく、刊行後一カ月、重版の運びとなった。これまでのアイヌ研究は、一部を除いてすべて和人によって行われてきた。山本さんの六十年にわたる研究成果たるこの著はアイヌ民族自身の手になる研究という点に大きな意義を持つ。ちなみに「イタクカシカムイ」とは言葉の霊という意味■4℃で密度が最大になるという水の性質については周知の事実。だが、この物性の本質的解明にはいまだ誰も成功していないのだそうだ。荒川泓『4℃の謎―水の本質を探る』（二四七二円）は、水の常識に潜む謎の解明に迫る力作。科学好きの青少年に好評だ。

慶應通信

〈新刊のご紹介〉

『ヴェトナム戦争の起源―アイゼンハワー政権と第一次インドシナ戦争』赤木完爾著（慶應義塾大学法学部専任講師）A5判二七〇頁／定価二九八七円税込／本書は近年利用可能になった米国政府関係文書などの広範な史料を詳細に検討することを通じて、一九四六―五四年の第一次インドシナ戦争に対する米国の政策を、その世界戦略の中に位置づけながら、米国にとってのヴェトナム戦争の起源を究明したものである。後年の米国のヴェトナム直接介入の契機が形成される過程を綿密に分析するとともに、アジアにおける冷戦の軍事化の実態を、米国の外交政策と軍事戦略の展開の中で解明する。アジアの冷戦史研究に新生面を開く労作である。著者は国際政治・戦争史専攻。

大学出版部ニュース

産能大学出版部

▼消費者の価値観が多様化するマーケットにあって、ヒット商品を次々と打ち出す名コンセプターのノウハウを集めた**『コンセプト・メーキング私の方法』**（坂井直樹編著・定価一五〇〇円）が売れている。いってみれば、時代の気分を商品に盛り込む魔術師たちの秘密をときあかした本だ。

▼運輸・食品や日用雑貨業界ではすでに威力を発揮している流通VAN（バリュー・アデッド・ネットワーク）をいよいよ出版業界も取り入れようとしている。当出版部もそれに備えて営業と倉庫を結ぶ在庫管理システムを導入した。とりあえずは、個々の書籍を電子コードにおきかえ、ゆくゆくは取次店と連動させ、さらに原価管理システム等を加えて総合管理システムに発展させようという試みだ。

玉川大学出版部

◆**『アメリカ大学の優秀戦略』**J・W・ギリー他／小原・高橋・田中訳　五一五〇円

「優秀な大学に共通するのは指導力と戦略であり、戦略とは既存の大学にはない新しい次元での卓越性を求め続けることだとの指摘は個々の実例をともなって説得力がある」**日本経済新聞**

「日本の私立大学がこれから直面する学生減という逆風に米国の大学は一九七〇年代に突入した。この逆風をものともせず発展した米国の大学二〇校の成功の秘密を分析した書である」**日経サイエンス**

◆**『日本的大学像を求めて』**天野郁夫　二四七二円

「先進諸国では理工系にゆく学生が少ないのに、日本では三分の一の学生が難しい理工系に進む。いまやコンプレックスは必要ないと著者はいう」**東京新聞**

中央大学出版部

石田　武編著『**刑事精神鑑定例集**』

責任能力の判断をめぐる鑑定例を集録して事例毎に論評を加えた本書は精神医学と刑事法学の接点を模索する。医学用語解説を付す。　定価一五四五〇円

中央大学企業研究所編『**日本の企業・経営と国際比較**』

日本的経営を歴史的に検討して、その管理構造の特性や海外への移転可能性にも論及する。

定価四三二六円

A・ブリューワー／渋谷　将・一井　昭訳『**世界経済とマルクス経済学**』

マルクス主義諸理論は、世界資本主義経済の理論的解明にどのような貢献をしてきたのか。レーニンの帝国主義論からウォーラーステインの世界システム論に至る諸理論の系譜を辿り再評価を試みる。定価三八一一円

東海大学出版会

明治以来、森鷗外や島村抱月によって紹介されてきた北欧文学は、ある時期から停滞し始める。その主な理由は、重訳に頼らぬ原語訳が外国文学紹介の正統とされるようになったにも拘わらず、北欧語文化圏の研究者数が圧倒的に不足していたからである。

しかし、日本の学問界は貪欲である。涸渇しかけていた北欧研究の世界に、第二世代とでも称すべき新たな研究者の一群が出現し、一気に活況を呈し始めたのである。

『**サガ選集**』『**サガの社会史**—中世アイスランドの自由国家』『**アンデルセンの時代**』と、北欧関係の新刊が続いたのは、そのような背景があってのことである。そして、これだけははっきりしている。北欧語文化圏の出版物はこれからが面白い。（M）

東京大学出版会

『**現代日本社会**』（全七巻）は、東大社会科学研究所の五年にわたる共同研究の成果をまとめたもので、既存の社会科学の理論的枠組を再検討し、「現代社会」のなかの「現代日本社会」を包括的に検討しようとする試みである。

後進資本主義国として出発した日本が、なぜこれほど急速に欧米に追いつき追い抜いてしまったか、「日本を軸に世界をみる」というのが本シリーズの狙いといえよう。

巻別構成は、一巻「課題と視角」（既刊、三九一四円）、二巻「国際比較(1)」（既刊、四三二六円）、三巻「国際比較(2)」、四巻「歴史的前提」、五巻「構造」、六巻「問題の諸相」、七巻「国際化」で、二巻以降、四、五、六、三、七巻の順で隔月刊行の予定。

東京電機大学出版局

地球にやさしいソーラーカー

藤中正治著　定価一五五〇円

▼日本のソーラーカーづくりの草分けで、朝日ソーラーカーラリー討論会の講師役としてもおなじみの東京電機大・藤中正治教授が著した入門書。ソーラーカーのしくみなどがわかりやすく紹介されている。　**朝日新聞**

▼この本は、環境問題を背景に太陽電池、電気自動車、ミニ・ソーラーカーに始まって実用ソーラーカーやレース用ソーラーカー、また市街地での実走記録、乗車感覚まで分析。ソーラーカーのコンセプトを明確にし、ソーラーカーの素晴らしさを理解してもらうのが狙い。（中略）二十一世紀に向けての項では①ソーラーカーの性能向上②コスト③エネルギー、マネーのゲイン④マーケットエリアについても触れている。　**日刊工業新聞**

東京農業大学出版会

『目でみる東京農大百年』

創立一〇〇周年を迎えた東京農業大学は、去る五月十八日、天皇・皇后両陛下の御臨席を仰ぎ、記念式典が盛大に催されました。そして式典参列者には、この『目でみる東京農大百年』が配られた。

この冊子は、東京農業大学が明治二十四年三月榎本武揚によって創設されてから今日に至るまで、百年の歩みというか、発展の歴史を写真で編集された写真集である。（入手希望の方は百周年事務局に申し込むと一部五千円で頒布している）

東京農業大学創立一〇〇周年記念事業の出版物としては、このほかに「東京農業大学一〇〇年史」、「新宿御苑に於ける和菊の伝統的栽培法写真図説」等が逐次刊行される予定である。

東京理科大学出版会

月刊誌「SUT」は理科大学の英文名の頭文字で学内教職員の熱心な編集にかかり卒業者の業績の紹介、学生の進路示唆と科学トピックス紹介に意を用いている。最近の特集記事は次の様です。

○計算しない電子計算機
○新しい深海潜水法
○極高真空法の実現と測定
○企業内教育について
○粒子間に働く力と真空測定
○グループテクノロジー
○予測と不確実性
○大気エアロゾル
○価値分析（考え方と方法）
○なぜ天気予報できるのか
○昆虫の遺伝子工学
○ハイデルベルグの真夏の夜の夢

一冊四五〇円送料五六円
年間購読歓迎12冊五一五〇円

法政大学出版局

▼既刊二百点を超え、なお刊行継続中の《日本社会運動史料》姉妹編として、新たに《戦後社会運動資料》の刊行が開始されました。占領期の政治と生活をつぶさに記録した、政党・労働組合・社会運動諸団体の機関紙誌や原資料、今では入手困難な一般紙誌を復刻する本シリーズは、戦後史、特に労働運動史、社会史、マスコミ史等に必備の資料集成として、広範な分野の注目を集めています。なお、詳細は内容見本をご請求下さい。

▼第一回配本（本年6月既刊）
民報社

『民報 東京民報』B4判全7巻
セット定価二五万七五〇〇円

▼第二回配本（本年9月刊行）
日本社会党機関誌

『社会思潮』　A5判全8巻
セット定価一五万四五〇〇円

放送大学教育振興会

▼平成四年に開講する科目の約四分の一に相当する六十六科目の印刷教材を作成中。『子供の世界』（宮澤康人・星薫）、『先進諸国の政治』（下斗米伸夫・高橋直樹）、『生活のための工学』（野呂影勇）、『推理と分析』（内井惣七）、『中国の説話と古小説』（竹田晃）、『生物有機化学』（井上祥平）、『数学の歴史』（長岡亮介）、『数量化理論』（駒澤勉）、『上代日本文学』（稲岡耕二）、『青年の心理と教育』（久世敏雄）、その他の力作が新たに登場する。

▼韓国大学出版部協会メンバー参加の『夏季研修会』の諸準備を、そのあい間に。ホスト校としての最終イベントが盛会裡に行われることを願いながら…。

▼当振興会では、齋藤正理事長が会長になり、新理事長に宮地貫一（前放送大学学園理事長）を迎えた。

明星大学出版部

宇喜多義昌　小野英夫著『**線形代数**』(定価一七五一円)

本書は、大学基礎課程の代数系教科書として刊行された書であり、はじめてベクトルや行列・行列式を学ぶ人々の参考書として役立つよう意図されている。

最近では多くの高校生がすでに「代数・幾何」を履習しており、その中で2次元3次元のベクトル、矢線ベクトルや行列を主とした行列論を学んでいる。この学習内容を考慮に入れながら、行列・行列式の一般的論証を厳密に取り上げるよりも、むしろその初歩的内容、すなわち基本性質、基本法則全般を例解を多く示しながらわかりやすく解説。また、その応用としては、解析幾何・線形変換へのものばかりでなく、線形変換の一種である射影演算子論、記述的多変量統計への応用も取り扱っている。

早稲田大学出版部

▼〈シリーズ　現代ドイツ文学〉の刊行を開始した。文学動向を捉えるシリーズ。既刊三冊。『アデナウアー時代の文学』(E・エンドレース、神崎他訳、定価三〇〇〇円)、『ゲルマーニア　ベルリンの死―ハイナー・ミュラーの歴史を待つ戯曲集』(H・ミュラー、越部他編訳、定価三九〇〇円)、『ドイツ語圏の女性作家―文学と映画』(C・ヴォルフ他、浅岡他編訳、定価二四〇〇円)

▼『国家と宗教―ドイツ国家教会法の再構成とその展開』(清水望、定価一四九三五円)　激しく揺れ続ける史的背景を綿密に跡づけ、国と宗教団体・教会との関係を明らかにした大著。

▼『新・テスト理論―教育情報の構造分析法』(竹谷誠、定価四八四一円)　S―P表分析などコンピュータを駆使した新たなテスト評価方法を提唱する。

名古屋大学出版会

▼F・K・リンガー著／西村稔訳『**読書人の没落―世紀末から第三帝国までのドイツ知識人**』(定価五一五〇円)　機械と大衆の登場によって文化的危機に見まわれた世紀末ドイツの学者＝読書人層は、一方で新しい人文社会科学を創り出すとともに、他方極度の混乱と対立を経てナチズムにからめとられていく。

▼川崎寿彦著『**薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学**』(定価五六六五円)　薔薇のイメジの変遷をたどりヨーロッパ文学史の転変を抉出した佳篇をはじめ、東西の文学と誠実な批評意識との希有な出会いを記した論考。

▼稲毛満春著『**マクロ経済政策の研究―石油ショック・変動相場制・対外不均衡**』(定価三六〇五円)　マクロ経済政策の基本問題に関する近年の理論的研究成果を総括。

京都大学学術出版会

▼川合英夫編著『流れと生物と―水産海洋学特論』(定価三八〇〇円)　一八名の研究者による流れの細胞レベルでの最前線の研究成果をまとめた専門研究書。海の流れとは海の環境の基本的動脈であり、また微細な神経系でもある。その流れと表裏の関係にある前線や水温躍層などの水塊構造やその変化をとおして水産生物の分布や移動、漁場形成に流れがいかなる影響を及ぼしているのかを解明する。最新の研究成果を踏まえた日本近海の黒潮、対馬暖流、親潮などの詳細な海流と水塊の模式図付。

▼"La Révolution française et la Littérature"(中川久定編、仏文、八月刊行予定、予価四〇〇〇円)　京都国際シンポジウムの発表論文を中心に革命期一〇年間の〝文学〟を総覧した書き下ろし論文集。

大阪経済法科大学出版部

○『大阪経済法科大学アジアフォーラム〈4号〉』

「北東アジア三考」のテーマで、今日の韓国の農地問題、朝鮮語の言語学的考察、資料の歴史的考察、以上三編の論文によって構成される。

○村川行弘・小林博編『河内地域史〈総論編〉』

古代に光芒を放った河内地域を歴史的・地理的な視点から考察する。

○上林貞治郎著『戦争と平和の黙示録』

侵略戦争の15年間を、反戦・非戦・厭戦の側面から、当時の豊富な資料を駆使して告発する。

○大阪経済法科大学アジア研究所編『間島総領事館関係資料・広東総領事館関係資料・鉄嶺領事館関係資料』

満州事変前夜の外交機密文書で、本学所蔵の資料。

関西大学出版部

▼田中充著『**欧米の中小企業問題**』（定価五九〇〇円）主要な国際会議・学会・学術交流を通じ、現代欧米諸国および日本の中小企業問題研究・調査の広がりと深化の実情を適確に分析。グローバルな意味での中小企業の望ましい存続・発展を究極目標とする国際的規模での中小企業論構築のための手がかりを模索した。内外研究者・実務家・行政担当者待望の書。▼石元清英著『**農村部落**』（定価五〇〇〇円）全国の被差別部落の約八割までが農村地域に位置するといわれているにもかかわらず、農村部落を対象とした研究調査は大きく立ち遅れている。特に被差別部落の農業に関する研究は皆無に近い。本書は豊富なデータに基づき「農業問題」という視点から農村部落の実態を明らかにした実証的研究である。

九州大学出版会

▼清水孝純著『**幻景のロシア—ペレストロイカの底流**』四六・三〇九〇円。「ここには研究者としての十ヶ月の滞在生活に裏付けられた説得力が十分にあるし、なによりも、苛立ちや失望にぶつかりながら、それを分析し、のりこえてゆく著者の、ロシアへの、ロシア的なるものへの深い愛情が感じとれる。」（図書新聞'91・6・29原卓也氏評）

▼高田和夫編『**ペレストロイカ—ソ連・東欧圏の歴史と現在**』A5・二八八四円。「学生がソ連に対して抱いているイメージが偏っているし、基本的にソ連のことを知らない。そこで学生にも読んでほしいというのが本づくりの大きな動機の一つです」（西日本新聞'91・5・19本と人）。政治、経済、教育、外交、民族と五つの柱を立て「ソ連・東欧史研究会」の会員が中心に執筆。

＊　＊

新刊案内 '91・4～7

（表示価格は税込価格です）

■北海道大学図書刊行会

イタクカシカムイ《言葉の霊》　山本　多助　二四七二円
教材刑法判例（第二版）　小暮得雄ほか編　二八八四円
西欧近代と農村工業　F・メンデルスほか／篠塚信義ほか訳　六一八〇円
4℃の謎―水の本質を探る　荒川　泓　二四七二円
土は求めている　北海道農業フロンティア研究会編　二四七二円
マリモの科学　阪井與志雄　一八五四円
緑の文化史　俵　浩三　一六四八円
雪氷調査法　日本雪氷学会北海道支部編　四六三五円
写真集・北大の四季　高嶋　英雄　二〇六〇円
Economic Effect of the Agricultural Policies in Japan.　黒柳　俊雄　三〇九〇円
The World Confronts Perestroika : The Challenge to East Asia.　伊東孝之編著　六一八〇円

■慶應通信

精神薄弱児の保健　小村　欣司　二〇〇〇円
アクセス論―その歴史的発生の背景―　フランシス・J・ベリガン編／鶴木眞監訳　三二九六円
日本社会福祉制度概説　稲葉　光彦　二二六六円
仮の権利保護をめぐる諸問題―労働仮処分・出版差止仮処分を中心にして―〈慶應義塾大学法学研究会叢書49〉　石川　明　三三九九円
経済史の風景　渡辺　國廣　二七八一円
金融論　塩澤　修平　二三六九円
政治権力研究の理論的課題〈慶應義塾大学法学研究会叢書51〉　霜野　寿亮　六三八六円
ヴェトナム戦争の起源―アイゼンハワー政権と第一次インドシナ戦争―　赤木　完爾　二九八七円

■産能大学出版部

さわやかミセスの仕事ってすばらしい　浜　利子　一三八〇円
コンセプト・メーキング私の方法　坂井　直樹　一五〇〇円
アメリカ流通業の新戦略　E・カントウィッズ著　若林　将夫訳　一五〇〇円
驚異のセールス・アクション・プログラム　森　鶴夫　一八〇〇円
売れないときの売れる営業　平松　陽一　一五〇〇円
経営数字の読み方・活かし方　山下　福夫　一五〇〇円
実践戦略行動型リーダーシップ　岡部　博　二〇〇〇円
変化対応の販売戦略　中井　久史　一六〇〇円
イトーヨーカドーのユニオン・コミュニケーション戦略　新井　厳／岩崎　寿次　一五〇〇円
積極思考で成功する　G・オークレー著　中村則之訳　一五〇〇円
バカといわれる人ほど大物になれる　中川　昌彦　一三八〇円
人生今が本番、いつも本番　石田　邦雄　一五〇〇円

参加型研修の進め方　大貫　章　二〇〇〇円
「ひらめき頭脳・儲け発想」の企画術　上里　剛士　一五〇〇円

■玉川大学出版部
解釈学研究　O・F・ボルノー／西村　晧・森田孝監訳　六六九五円
日本的大学像を求めて　天野　郁夫　二四七二円
比較文化序説―宗教と文化―　井門富二夫　二八八四円
思索と生涯を語る　O・F・ボルノー　ゲベラー&レッシング編／石橋哲成訳　二四七二円
アメリカ大学の優秀戦略　ギリー&フルマー&リースリング　シューファー／小原芳明・高橋靖直・田中義郎訳　五一五〇円
イメージと目　E・H・ゴンブリッチ／白石和也訳　九二七〇円
イギリス出版史　J・フェザー／箕輪成男訳　三九一四円
日本の学歴エリート　麻生　誠　四九四四円

■中央大学出版部
法律家を目指す諸君へ―一九九一年度版―　中央大学法職講座運営委員会編　一五四五円
日本の企業・経営と国際比較　中央大学企業研究所編　四三二六円
刑事精神鑑定例集　石田　武編著　一五四五〇円
世界経済とマルクス経済学　A・ブリューワー／渋谷　将・一井　昭訳　三八一一円
歴史のなかの多国籍企業―国際事業活動の展開と世界経済―　A・タイコーヴァ他／鮎沢成男他監訳　四八四一円
独・英・日対訳　ドイツ憲法の解説―西ドイツ基本法・東ドイツ憲法・国家条約―　須郷登世治　五一五〇円
フランス近代ソネット考―変則の美学―　加納　晃　三〇九〇円

■東海大学出版会
伊勢物語〈桃園文庫影印叢書〉　福井貞助解題　二五七五〇円
高齢化社会の諸問題　立山龍彦編著　二五七五円
行政と執行の理論〈現代の政治学シリーズ③〉　宇都宮深志・新川達郎編　三五〇二円
かたちとイメージの記号論〈記号学研究11〉　日本記号学会編　三〇九〇円
固体の諸性質〈バーンズ固体物理学④〉　G・バーンズ／長尾・米沢・澤田・小島・中村訳　三六〇五円
アナログ・ディジタル伝送回路の基礎　町田・小島・高橋・西川編　三九一四円
日本産土壌動物検索図説　青木淳一編　一五四五〇円
体育科教育入門　小村渡岐麿・水田　嘉美　二五七五円
サガ選集　日本アイスランド学会編訳　九二七〇円
超音波診断要覧Ⅱ　消化器編　東海大学病院超音波検査室編　六六九五円
日本淡水動物プランクトン検索図説　水野　寿彦・高橋　永治編　一五四五〇円
サガの社会史　J・L・バイヨック／柴田・井上訳　六一八〇円
南の島の自然観察　土屋　誠・宮城・康一編　二九八七円
松前重義　その国際活動Ⅰ　編纂委員会編　三六〇五円
アンデルセンの時代　早野　勝巳　二八八四円
留学生の数学Ⅰ　東海大学留学生教育センター編　二二六六円
発生―プロセスとメカニズム　小林・山下編　三二九六円
専門海洋学実習ビデオ　海洋資源編　東海大学海洋学部編　六一八〇円

■東京大学出版会
日中関係　1945―1990〈UP選書264〉　田中　明彦　一六四八円

中国の千年王国　三石　善吉　三二九六円
土の物質移動学　中野　政詩　三七〇八円
南インド社会経済史研究　柳澤　悠　二〇六〇〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇13　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇13　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
宇沢弘文編　三九一四円
日本企業のダイナミズム
鯨とイルカのフィールドガイド　大隅清治監修　笠松不二男・宮下　富夫　一八五四円
大日本史料　第四編之七　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
大日本史料　第四編之八　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
英米法辞典　田中英夫編集代表　一五四五〇円
現代日本社会1　課題と視角　東京大学社会科学研究所編　三九一四円
詞華集　日本人の美意識　第一　秋山　虔他　二〇六〇円
がん遺伝子と抑制遺伝子〈がんのバイオサイエンス1〉　渋谷正史編　二四七二円
河原巻物の世界　脇田　修　四七三八円
社会保障の新しい理論を求めて　隅谷三喜男編　三八一一円
戦後日本の市場と政治　樋渡　展洋　三九一四円
アメリカ現代政治の分析　阿部斉・五十嵐武士編　四七三八円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇14　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇14　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第四編之九　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
大日本史料　第四編之十　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
混沌〈東京大学公開講座53〉　有馬朗人編集代表　二二六六円

詞華集　日本人の美意識　第二　三好行雄他　二〇六〇円
昆虫発生学入門〈UPバイオロジー88〉　安藤　裕　一六四八円
ヒトのがんウイルス〈がんのバイオサイエンス2〉　吉田光昭編　二四七二円
カナダ現代政治　岩崎美紀子　二〇六〇円
ウェーバーの宗教理論　金井　新二　三九一四円
統計学入門〈基礎統計学1〉　東京大学教養学部統計学教室編　二八八四円
教養の数学・計算機　金子　晃　二五七五円
経済サービス化と産業展開　大阪市立大学経済研究所　中野安・明石芳彦編　三九一四円
スラムの経済学　中西　徹　四六三五円
学校・職業・選抜の社会学　苅谷　剛彦　四九四四円
西山光一日記　1925－1950年　新潟県一小作農の記録　西田美昭・久保安夫編　二四七二〇円
帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇15　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和篇15　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第四編之十一　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
大日本史料　第四編之十二　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
チンパンジーから見た世界〈認知科学選書23〉　松沢　哲郎　二二六六円
現代日本社会2　国際比較(1)　東京大学社会科学研究所編　四三二六円
発がんとがん細胞〈がんのバイオサイエンス3〉　黒木登志夫編　二四七二円
イスラム都市研究　羽田正・井村徹編　五九七四円
新編　海岸工学　堀川　清司　五三五六円

帝国議会貴族院委員会速記録・昭和篇16　国立国会図書館所蔵　一二三六〇円
帝国議会衆議院委員会議録・昭和編16　国立国会図書館所蔵　一六四八〇円
大日本史料　第四編之十三　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円
大日本史料　第四編之十四　東京大学史料編纂所編　一三三九〇円

■東京電機大学出版局

図解　第二種電気工事士技能試験テキスト　東京電機大学出版局編　一五四五円
実用MS－DOS&BASIC－ビジュアル化とマウスの技法　黒田　康太　二〇六〇円
第一種電気工事士受験必携〔3訂版〕　東電学園高等部編　二四〇〇円
特殊情報処理試験の徹底研究〔第3版〕　日本ユニシス情報処理システム研究会編　二五七五円
無線工学の基礎Ⅰ〈2陸技1・2総通受験教室①〉　松原　孝之　二五七五円
入門カラーテレビ〔8訂版〕　直川　一也　二六七八円
高校生のためのパソコン－ワープロ・表計算・図形・BASIC－　秋冨　勝他6名　一七五一円
ハードと学ぶMS－DOS－HDDを使いこなすまで－　白土　義男　二五七五円
改訂　交流回路〈理工学講座〉　宇野　辛一・磯部　直吉　三二九六円
入門有機化学　佐野　隆久　三五〇二円

■東京農業大学出版会

日本産異翅半翅類の亜社会性－カメムシ類の親子関係－　立川周二著　二五〇〇円
食糧と文化と環境とバイテク〈東京農業大学市民講座(1)〉　東京農大市民講座実行委員会編　二五〇〇円
東京農業大学入学試験問題と解答例－平成三年・平成二年度－　東京農業大学出版会編　一二〇〇円

■東京理科大学出版会

■法政大学出版局

マルクス－人間的現実の哲学－　M・アンリ／杉山吉弘・水野浩二訳　五九七四円
山形ふしぎ紀行－井上円了の足跡を辿る－　烏兎沼宏之　一九五七円
昭和精神史の一断面－法哲学者加古祐二郎とその日記－　大橋智之輔・他編著　三〇九〇円
五感－混合体の哲学－　M・セール／米山親能訳　四九四四円
北西航路－ヘルメスⅤ－　M・セール／青木研二訳　二五七五円
ユダヤ人国家　テオドール・ヘルツル／佐藤康彦訳　一九五七円
テレビ視聴の構造－多メディア時代の〈受け手〉像－　P・バーワイズ他／田中義久・他訳　三三九九円
労働の人間化を求めて　嶺　学　二二六六円
開発経済学－形成と展開－　絵所　秀紀　二九八七円
雑誌『同時代』57号　黒の　会編　一〇三〇円
ポストモダニズムの政治学　L・ハッチオン／川口喬一訳　二九八七円
哲学の自食症候群　J・ブーヴレス／大平具彦訳　二八八四円
戦後社会運動資料・第一回配本『民報　東京民報』全七巻
法政大学大原社会問題研究所編／全七巻セット・二五七五〇〇円
諸科学の機能と人間の意義

現代哲学の主潮流　3　E・パーチ／上村忠男監訳　四九四四円
　W・シュテークミュラー／中埜肇・竹尾治一郎監修　五九七四円
ニーチェ　G・ピヒト／青木隆嘉訳　四九四四円
十七世紀イギリスの宗教と政治　C・ヒル／小野功生訳　五九七四円
アインシュタインと科学革命　L・フォイヤー／村上陽一郎・他訳　三九一四円
科学史・科学哲学研究　G・カンギレム／金森修監訳　六四八九円
旅・戦争・サロン　髙橋　安光　三三九九円

■放送大学教育振興会（○印ビデオ・ソフト）

○※住まいと環境（VHS15巻セット・1巻45分）　本間　博文ほか　三○○○○○円
○※法学入門（VHS15巻セット・1巻45分）　矢崎　光圀　三○○○○○円
○※民法（VHS15巻セット・1巻45分）　山田　卓生　三○○○○○円
○※産業と環境・資源（VHS15巻セット・1巻45分）　黒澤　一清　三○○○○○円
○※設計工学（VHS15巻セット・1巻45分）　塚田　忠夫　三○○○○○円
○※日本の自然（VHS15巻セット・1巻45分）　奈須　紀幸ほか　三○○○○○円
○※環境科学（VHS15巻セット・1巻45分）　山根　靖弘　三○○○○○円
○※現代の経済学（VHS15巻セット・1巻45分）　嘉治　元郎　三○○○○○円
○※日本経済と産業と企業（VHS15巻セット・1巻45分）　磯部　浩一ほか　三○○○○○円
○※統計的データ解析とソフトウエア（VHS15巻セット・1巻45分）　大隅　昇　三○○○○○円
○※量子論（VHS15巻セット・1巻45分）　野田　春彦ほか　三○○○○○円
○※恒星天文学（VHS15巻セット・1巻45分）　吉岡　一男　三○○○○○円
○※力とエネルギー（VHS15巻セット・1巻45分）　戸田　盛和　三○○○○○円
○※家族法（VHS15巻セット・1巻45分）　鍛冶　良堅　三○○○○○円
○※基礎化学（VHS15巻セット・1巻45分）　平川　暁子　三○○○○○円
○外国語への招待(1)タイ語（VHS1巻45分）　綾部　裕子　二○○○○円
○外国語への招待(2)アラビア語（VHS1巻45分）　本田　幸一　二○○○○円
○外国語への招待(3)スワヒリ語（VHS1巻45分）　守野　庸雄　二○○○○円
○小盆地宇宙（VHS1巻45分）　米山　俊直　二○○○○円
○発展途上国の土地管理（VHS1巻45分）　石見　利勝　二○○○○円
○民族学への旅(1)中央アジア（VHS1巻45分）　加藤　九祚　二○○○○円
○民族学への旅(2)モンゴル・シベリア（VHS1巻45分）　加藤　九祚　二○○○○円
○日本の企業は何を目指すのか（VHS1巻45分）　鈴木　治雄　二○○○○円
○地球磁場とその役割（VHS1巻45分）

○電気を通すガラス（VHS1巻45分）　福島　直　二〇〇〇〇円
○面白い電磁気の実験（VHS1巻45分）　南　努　二〇〇〇〇円
霜田　光一　二〇〇〇〇円
○加速器科学（VHS1巻45分）　西川　哲治　二〇〇〇〇円
○外国人留学生の現状（VHS1巻45分）　遠藤　誉　二〇〇〇〇円
○超伝導の世界(1)模索から応用へ（VHS1巻45分）　鹿児島誠一　二〇〇〇〇円
○超伝導の世界(2)メカニズムと高温超伝導（VHS1巻45分）　鹿児島誠一　二〇〇〇〇円

■明星大学出版部

倫理学の無知　曽我　英彦　二八八四円
線形代数　宇喜多義昌　小野　英夫　一七五一円

■早稲田大学出版部

タッチラグビー―絵でみるルールブック―　日本タッチ協会監修／口元周策著　九〇〇円
世論民主主義―女性と政治―　青木　泰子　二五七五円
新・テスト理論―教育情報の構造分析法―　竹谷　誠　四八四一円
旅人の思索―現代キリスト教思想の根底にあるものを求めて―　岩波　哲男　二三六九円
源氏物語と平安文学　第2集　早稲田大学大学院中古文学研究会編　六六九五円
一筆齊文調〈芝居絵図録1〉早稲田大学演劇博物館編　五〇〇〇円
国家と宗教―ドイツ国家教会法の再構成とその展開―　清水　望　一四九三五円
古代探叢Ⅲ―早稲田大学考古学会創立40周年記念考古学論集―　滝口　宏編　一六四八〇円
お伊勢山遺跡の調査　第2部　旧石器時代　早稲田大学所沢校地文化財調査室編　一五八〇〇円
早稲田大学蔵資料影印叢書　国書編全32巻　神保五彌編　一五四五〇円
第22巻　浮世草子集　二
早稲田文学　5月号～8月号　早稲田文学会　各五三〇円
シリーズ　現代ドイツ文学
アデナウアー時代の文学　エンドレース／神崎他訳　三〇〇〇円
ゲルマーニアベルリンの死　ミュラー／越部他編訳　三九〇〇円
―ハイナー・ミュラーの歴史を待つ戯曲集―
ドイツ語圏の女性作家　ヴォルフ他／浅岡他編訳　二四〇〇円
―文学と映画―

■名古屋大学出版会

マクロ経済政策の研究―石油ショック・変動相場制・対外不均衡―　稲毛　満春　三六〇五円
読書人の没落―世紀末から第三帝国までのドイツ知識人―　F・K・リンガー／西村　稔訳　五一五〇円
薔薇をして語らしめよ―空間表象の文学―　川崎　寿彦　五六六五円
History of Japanese medicine in the Edo Era—Its social and cultural backgrounds —　長与　健夫　三六〇五円
人工心肺―理論と実際―　阿部稔雄編　五一五〇円

■京都大学学術出版会

流れと生物と―水産海洋学特論―　川合英夫編著　三八〇〇円

■大阪経済法科大学出版部

アジアフォーラム〈4号〉　大阪経済法科大学アジア研究所編　七〇〇円

■関西大学出版部

農村部落―その産業と就労―　石元　清英　五〇〇〇円

カフェハウスの文化史　小川　悟訳　四七〇〇円

諸蕃志　藤善真澄訳注　六〇〇〇円

■九州大学出版会

中国の経済制度と統計・会計制度　九州大学中国経済研究会編　三五〇二円

英語の動詞―形とこころ―　木下　浩利　三九一四円

Three Essays on Humanism and Survival in the 21st Century（別冊和文付）　井口　潔　二〇六〇円

ペレストロイカ―ソ連・東欧圏の歴史と現在―　高田和夫編　二八八四円

幻景のロシア―ペレストロイカの底流―　清水　孝純　三〇九〇円

長大斜張橋の解析と設計　大塚久哲監修　三五〇二円

本能行動とゲシュタルト知覚　大村　敏輔　二八八四円

文字の歴史とデザイン〔改訂版〕白石・工藤・河地著　三二九六円

九州のなかの世界〈九州大学公開講座23〉　九州大学公開講座委員会編　二〇六〇円

生活と科学Ⅲ〈九州大学公開講座24〉　九州大学公開講座委員会編　二〇六〇円

●大学出版部協会役員（1991年6月30日現在）

幹事長	斎藤　至弘	（東京大学出版会／03-3812-2111）
幹　事（総務担当）	朝武　清実	（東京電機大学出版局／03-3294-1551）
〃　（　〃　）	三浦　邦宏	（明星大学出版部／03-3817-0551）
〃　（　〃　）	鈴木　吉郎	（早稲田大学出版部／03-3203-1551）
〃　（会計担当）	小野沢公男	（産能大学出版部／03-3724-9101）
〃　（編集担当）	関野　利之	（玉川大学出版部／0427-28-3207）
〃　（営業担当）	阿部　好文	（法政大学出版局／03-3237-1731）
〃　（広報担当）	矢野　昭造	（放送大学教育振興会／03-3502-2750）
〃　（　〃　）	赤川　三郎	（中央大学出版部／0426-74-2350）
〃　（国際担当）	加藤千曼樹	（東海大学出版会／03-3356-1541）
〃（刊行助成担当）	山下　正	（東京大学出版会／03-3812-2111）
監　事	山國　顯	（慶應通信／03-3451-3168）
常任顧問（日生財団担当主幹）	石井　和夫	（東京大学出版会／03-3812-2111）
顧　問	中平千三郎	（東京大学出版会／03-3812-2111）
〃	箕輪　成男	（神奈川大学／0463-59-4111）
〃	田口迪太郎	（玉川百科刊行会／03-3293-7260）
〃	山田　渉	（港北出版印刷㈱／03-5466-2201）
編集部会（部会長）	成田　隆昌	（玉川大学出版部／0427-28-3210）
〃　（副部会長）	永井隆三郎	（中央大学出版部／0426-74-2352）
営業部会（部会長）	惣塚　一雄	（東京大学出版会／03-3812-6862）
〃　（副部会長）	松岡　茂和	（東海大学出版会／03-3356-1541）
〃　（　〃　）	鎌田　靖彦	（法政大学出版局／03-3237-1731）
〃　（　〃　）	唐澤　幹雄	（早稲田大学出版部／03-3203-1551）
刊行助成部会（部会長）	山下　正	（東京大学出版会／03-3812-2111）
〃　（副部会長）	平川　俊彦	（法政大学出版局／03-3237-7341）
国際担当委員	中陣　隆夫	（東海大学出版会／03-3356-1541）
〃	山口　雅己	（東京大学出版会／03-3815-1900）

●19大学出版部代表者及び協会・部会等担当者一覧

	代表者	協会担当	編集部会	営業部会	刊行助成部会
北海道大学図書刊行会	中村　睦男	前田　次郎	田宮　治男	管波　秀樹	田宮　治男
慶應通信	道祖土廣一	山國　顯	加賀爪　薫	小林　丈生	佐藤　武次
産能大学出版部	上野　一郎	小野沢公男	片桐　広行	飯田　栄一	小野沢公男
玉川大学出版部	小原　哲郎	関野　利之	成田　隆昌	斎藤　勇	宮原　正弘
中央大学出版部	澤島　政夫	赤川　三郎	永井隆三郎	古賀　忠夫	田中　浩
東海大学出版会	松前　達郎	加藤千曼樹	木下　正之	松岡　茂和	三浦　義博
東京大学出版会	養老　孟司	斎藤　至弘	佐藤　修	塚上　輝雄	渡辺　勲
東京電機大学出版局	廣川　利男	朝武　清実	岩下　行徳	高埜　則和	朝武　清実
東京農業大学出版会	内田　計手	行元　鐵夫	川添　藤三	川添　藤三	藤村　洋
東京理科大学出版会	橘高　重義	後藤　善治	牧野　桂造	牧野　桂造	牧野　桂造
法政大学出版局	阿利　莫二	阿部　好文	秋田　公士	鎌田　靖彦	平川　俊彦
放送大学教育振興会	齋藤　正	矢野　昭造	小谷　昭夫	鎌田　敏男	加藤　直彦
明星大学出版部	児玉　三夫	三浦　邦宏	丸山とも子	村松　達文	丸山とも子
早稲田大学出版部	奥島　孝康	鈴木　吉郎	寺山　浩司	唐澤　幹雄	新井　善博
名古屋大学出版会	潮木　守一	伊藤　八郎	橘　宗吾	佐野　雄治	後藤　郁夫
京都大学学術出版会	藤澤　令夫	八木　俊樹	中井　康之	日沖　桜皮	八木　俊樹
大阪経済法科大学出版部	木本　幸造	岩城　孝侑	咸　勝規	児玉清一郎	岩城　孝侑
関西大学出版部	久井　忠雄	井内　雄二	熊　博毅	矢田　敏男	三宅　邦弥
九州大学出版会	津守　常弘	藤木　雅幸	永山　俊二	鳥井　四朗	藤木　雅幸

大学出版部協会一九九〇年度年間主要行事報告

（一九九〇年四月～一九九一年三月）

■一九九〇年度通常総会が四月二十七日にアルカディア市ヶ谷において十六加盟校、二十五名が出席して開催された。各担当幹事より八九年度活動報告と決算報告および監査報告があって承認され、九〇年度事業計画案と予算案についても承認された。また京都大学学術出版会よりの入会申請が承認され、役員改選については幹事会案が承認された。

■かねてより出版会の設立が待たれていた京都大学で一九八九年正式に京都大学学術出版会（藤沢令夫理事長と八木俊樹協会担当）が発足し、四月二十七日の総会において協会への入会が承認された。これによりわが協会は加盟校が十九大学出版部の陣容となった。

■五月十六～二十日には中国北京市において中国大学出版社協会・中国教育図書進出口公司との協力により「第二回日本大学出版物展覧会」を開催した。これは、一九八一年に北京とハルビンで開催された第一回の展覧会に続くものとして九年ぶりに実現された。今回は全国の大学・短大および付属研究機関で刊行された図書や紀要類約七千冊が展示され、連日多数の入場者があり好評を得た。なお、開幕式には協会から山下副幹事長ら七名の代表団が訪中した。

■七月十九日～二十三日に池袋のサンシャインシティで開催された「一九九〇年東京ブックフェア」に、協会では二ブースを確保して約六百点の出展を行った。協会ブースには期間中、韓国や中国の関係者はじめ内外の多くの熱心な参観者が訪れ、アンケートの実施も行われた。

■九月一日～七日には北京で開催された「一九九〇年第三回北京国際図書展示会」にブース展示を行い、協会から約二百五十点が出品された。開会式には山下副幹事長が出席した。

■毎年行われている「夏期研修会」（九月六日～八日）は、今回は早稲田大学出版部がホスト校となり、東海大学三保研修館を会場に十七校四十六名が参加して実施された。東京大学出版会の斎藤至弘氏による編集・制作を中心としたケーススタディに続き、特別講演には医学書院会長の椿孝雄氏に「出版者の権利」についてお願いした。

■例年の「フランクフルト・ブックフェア」（十月三日～八日）は、今回は期せずしてドイツ統一の日の十月三日から開催されたが、協会としては三回目の出展参加を行った。今回は「日本年」ということもあって、初めて協会独自のブースをジャパンコーナーに設けて九十九点を出品した。開会式には協会から正・副両幹事長はじめ協会メンバー数名が参加した。

■恒例となった「日韓大学出版部協会合同セミナー」も第九回を迎えて十月十二日韓国の慶州で行われた。今回は、日程の上でフランクフルト・ブックフェア行事と重複したために、協会よりは三名が代表として出席し韓国側五十名とのセミナーを行った。

■一九九〇年の締めくくりの年末例会が十二月五日に、今回からのホスト校放送大学教育振興会のお世話により、大蔵省印刷局記念館を会場に幹事会、各部会が実施された。なお開会に先立って会場内の記念館で印刷局の歴史資料やお札・切手などの展示品の見学会が行われた。

■取次店各位を招待して毎年行っている人文・社会科学系五団体による出版五団体合同新年会が、今年は法経会が当番となり一月三十一日にアルカディア市ヶ谷において開催され、協会からは十三加盟校二十六名が参加した。

ISSN 0913-3305

大学出版部協会加盟出版部一覧

北海道大学図書刊行会	〒060 札幌市北区北9条西8丁目 北大構内 TEL. 011-747-2308 FAX 011-736-8605
慶應通信	〒108 東京都港区三田2－19－30 TEL. 03-3451-3584 FAX 03-3451-3122
産能大学出版部	〒152 東京都目黒区自由が丘2－16－5 自由が丘サンビル TEL. 03-3724-9101 FAX 03-3717-4346
玉川大学出版部	〒194 東京都町田市玉川学園6－1－1 TEL. 0427-28-3213 FAX 0427-28-3218
中央大学出版部	〒192-03 東京都八王子市東中野742－1 TEL. 0426-74-2351 FAX 0426-74-2354
東海大学出版会	〒160 東京都新宿区新宿3－27－4 新宿東海ビル TEL. 03-3356-1541 FAX 03-3341-1833
東京大学出版会	〒113 東京都文京区本郷7－3－1 東京大学構内 TEL. 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958
東京電機大学出版局	〒101 東京都千代田区神田錦町2－2 TEL. 03-3294-1551 FAX 03-3294-2807
東京農業大学出版会	〒156 東京都世田谷区桜丘1－1－1 TEL. 03-3420-2131 FAX 03-3706-8851(総務課)
東京理科大学出版会	〒162 東京都新宿区若宮町19 TEL. 03-3235-5692 FAX 03-3235-9632
法政大学出版局	〒102 東京都千代田区富士見2－17－1 TEL. 03-3237-1731 FAX 03-3237-8899
放送大学教育振興会	〒105 東京都港区虎ノ門1－14－1 郵政互助会琴平ビル4F TEL. 03-3502-2750 FAX 03-3592-2482
明星大学出版部	〒191 東京都日野市程久保2－1－1 TEL. 0425-91-5115 FAX 0425-93-0192
早稲田大学出版部	〒169 東京都新宿区戸塚町1－103 TEL. 03-3203-1551 FAX 03-3207-0406
名古屋大学出版会	〒464-01 名古屋市千種区不老町1 名古屋大学構内 TEL. 052-781-5027 FAX 052-781-0697
京都大学学術出版会	〒606-01 京都府京都市左京区吉田本町 京都大学構内 TEL.075-761-6182 FAX 075-761-6182
大阪経済法科大学出版部	〒581 大阪府八尾市楽音寺6－10 TEL. 0729-41-8211 FAX 0729-41-9979
関西大学出版部	〒564 大阪府吹田市山手町3－3－35 TEL. 06-388-1121 FAX 06-389-5162
九州大学出版会	〒812 福岡市東区箱崎7－1－146 九州大学構内 TEL. 092-641-0515 FAX 092-641-0172

大学出版(第12号)'91夏 平成3年9月1日発行 発行者 大学出版部協会
〒113 東京都文京区本郷7丁目3番1号東大構内 東京大学出版会内 電話 03-3812-2111 (内)7954
頒布価格100円(本体97円)〒共